

とや、サラフィー主義者と言われる武力闘争を辞さないムスリム集団によりコプト教会が襲撃されるといった事象が挙げられる。

本発表では、このような社会状況のなかで、マイノリティであるコプト・キリスト教徒が革命とそれにもなう社会変化をどのように受け止めているのかという点について、二〇一一年七月から八月にかけてエジプト南部の小都市ミニヤとフランスのパリ郊外でコプト・キリスト教徒（コプト正教徒）に対して行った半構造化インタビュー調査の結果をもとに考察を行った。

一月二五日革命は民衆による反政府運動により結実した。しかし、実際にはミニヤでデモに参加したインタビュイーはいなかった。フランスにおいてもパリでデモが行われたが、これに参加したインタビュイーもきわめて少ない。一月二五日革命はフェイスブックやツイッターを中心としたインターネットが抗議活動への動員に大きな役割を果たしたが、本調査の回答からはインターネットよりもテレビが人々と革命をつなぐ主要な媒介ツールであったことが明らかになった。

コプト正教会の長であるシヌヌダ三世総主教は、当初ムバラクを支持しており信徒のデモ参加自粛を呼びかけていたが、二月十五日には一転して革命を称賛するコメントを出した。総主教のこのような日和見的とも言える動きは、一九八一年のサーダット大統領（当時）との対立と修道院への幽閉という経験を繰り返さないための「戦略」として考えることができるだろう。しかし、そうしたことも含め、革命に対する総主教

の対応について言及したインタビュイーはほとんど皆無であった。そこには、ムバラク政権が崩壊した今、民衆の意向を反映しているとは言い難かった総主教の当初の対応に対する平信徒や修道士の複雑な思いが反映されていると考えられる。

ミニヤのインタビュイーの約六七%が革命によってムスリムとコプトの関係が悪化したとする一方、フランスのインタビュイーはコプトムスリム関係に変化を感じていない割合が若干高い。これは、彼らが国外にいるためエジプト社会の微妙な変化をすぐに感じ取ることが難しいことを表していると考えられる。

大阪万博キリスト教館にみるキリスト教の戦後

川口葉子

本発表では、一九七〇年に大阪吹田で行われた日本万国博覧会に出席されたキリスト教館とそれをめぐる批判から、七〇年代日本においてキリスト教が問い直されていく動きと、その契機となったものを考えようとするものである。

日本万国博は、六四〇〇万人の入場者と、高度経済の成果として華々しく存在し、また語られていった。そのなかに、最も小さいパビリオンとしてキリスト教館が存在した。それは、日本の教会が伝道のために構想・立案し、万国博で初めてプロテスタント、ローマ・カトリック、バチカンという三者が共同で出展したものであった。

キリスト教館出展の構想は一九六七年三月ごろからはじまり、一九六八年八月にはテーマが「目と手―人間の発見」(和解による調和・創造による進歩)と決定し、プロデューサーの遠藤周作、阪田寛夫、三浦朱門をもとに企画が進められていく。そのなかで、一九六八年末頃から、万博キリスト教館反対運動がプロテスタントの日本基督教団のなかで活発化する。東京神学大学・同志社大学など、多くの神学部学生を中心に、青年牧師や信徒が教団の内部から問題提起を行った。反博運動は、単にキリスト教館出展に反対するだけのものではなく、万博の問題性からそこに参加するキリスト教のあり方そのものを問うた。それは、事柄を具体的状況においてとらえない神学のあり方を鋭く批判するものであり、「教会はこの世とは違う」とする教養主義的・権威主義的キリスト教のあり方に対して抗議するものであった。そして、反博運動は未解放部落、朝鮮人居住地区、被抑圧地区の解放闘争と結合し、学生たちはひとり一人として人々と共に生きることを表明した。それはイエスのもった志向によって現実を捉え、生きようとしたものである。そこにおいては人々と共に生きたものとしてのイエスの生き方にならうことが、本来的なものとしてのキリスト教であるとされた。

一方キリスト教館は、芸術館としてそれを捉えたプロデューサーの意図により、反博運動とは一線を画し、芸術性や表現の問題として構想・演出がなされていく。意図されていたことのひとつは、日本のコンテクストにおけるキリスト教を表現することであり、展示や空間創出を通してそれを表現していった。

展示のなかに、問題提起として「日本人の哀しみ」という組写真、解決の象徴として「ノア」「世界の破れをなうキリスト」というブロンズ像、課題の提起として *Society* (社会・開発・平和) の組写真という三段階が提示された。それは、日本人のなかに巣くう問題性を見出し、それがキリストによって解決されること、そしてその解決をもって貧困や病に対して自ら動くことが企画されるものであった。「人間の発見」という主題を通して考えると、入場者を他者に対するまなざしに導かせるという方向性をもつものであった。そして、他者との関係性の中にキリスト教の救いが提示されていくものであった。

反博運動にかかわった学生たちは、イエスの生き様のなかに自らの実存に対する答えを求め、それを本来的なキリスト教として既存のキリスト教の問い直しをはかった。学生たちは万博に参加するキリスト教を批判したが、矛先であったキリスト教館は、プロデューサーの演出によって、伝道を目指した教団上層部の意図とは異なって存在した。キリスト教の日本におけるあり方として提示されたのは、キリスト教の福音や救済の直接的な提示ではなく、他者との関係性のなかで救いを見出していくことである。それは、学生たちの目指したイエスの生き様につながるものとして提示できる。一九七〇年代においては、他者との関係性が既存のキリスト教を問い直すものとして大きな意味をもっていたのである。